

博物館 アラカルト 17

● はんけいきじず 磻溪跪餌図 谷文晁画

岩の上に坐って前を見つめる老人。よく見ると前には釣竿があります。この釣竿には針も餌もついていません。この人物、釣る気があるのか、ないのか分かりませんが、実はとっても有名な人なのです。

中国の周の時代。有名な孔子もこの時代の人です。氏は呂、名は尚といい、またの名を「太公望」といいます。釣り好きの人を指す言葉として今でも使われていますよね。

この「太公望」の図はよく描かれた題材なのですが、そのお話は司馬遷しばせんという人の書いた『史記』という本の中にあるお話です。

紀元前11世紀頃、周という国の文王は、狩りに出かける前に占いをしました。すると、獲物は龍でも虎でもなく、周を隆盛に導く臣であろうと出ました。

さっそく狩りに出かけた文王は、渭水いすいのほとり（磻溪）で釣糸を垂れている呂尚を見つけます。呂尚と話をした文王は「この人物こそ、大公（文王の祖父）が望んだ人物に違いない。」とこの老人を連れ帰り、軍師としました。

その後、周は中国の覇者となり、呂尚は斉の国の始祖となりました。呂尚は天下を釣り上げたのです。

この「磻溪跪餌図」は、神辺の儒学者・菅茶山の七十歳を祝って江戸の文人画家・谷文晁が文化十四年（1817）に贈ったものです。

茶山と文晁は、文化元年（1804）に、江戸の柴野栗山邸で対面して以来、親交がありました。

中国の故事や偉人などはよく画題にされたので、こうした図も多く描かれています。でも、お祝いに茶山をなぞらへた「太公望」の図だったのはなぜでしょうか？

呂尚は、占いによりその存在を文王が知り、請われて軍師となりました。茶山の場合も、福山藩主・阿部正倫が林大学頭との会話から「当代一の詩人」が、藩内に存在することを知り、請われて藩儒となります。ともに年齢を重ねた後であったことも共通しています。

こうした共通点から、茶山を中国の呂尚に例え、「人生まだまだこれからですよ。」というメッセージをこめていたのではないのでしょうか？

一方、茶山は聖人に例えられた事に面映いなのか、「釣りでもしてゆっくり過ごせ」といっているのかと詩を作っています。

絵を鑑賞するときそんな背景がわかれば、より一層楽しめます。しかし、一方では余計な事は、考えず、ただ前に立って眺めて「なんとなく良い」でもいいのではないのでしょうか？

この図は、企画展「広島発 はるかなるシルクロード」（7月11日～8月24日）に展示されます。

（主任学芸員 岡野将士）



「磻溪跪餌図」
谷文晁画 岡本花亭賛